「シマ宇宙」への通路  著者：宮古・南洋・八重山

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>澤井 真代</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>法政大学沖縄文化研究所</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>沖縄文化研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>203-241</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>2020-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>URL <a href="http://doi.org/10.15002/00023258">http://doi.org/10.15002/00023258</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY
「シマ宇宙」への通路

1. Mさんとの出会い

本稿では、筆者が石垣島川平集落での調査中に出会った一人の宫古島出身女性（Mさん）への聞き取り調査から、Mさんが第二次世界大戦中に南洋群島のヤップ島へ渡り、宮古島に戻って終戦を迎え、八重山諸島石垣島に渡り、川平集落に住むに至った経緯を報告する。

筆者はもとから、二〇〇〇年（平成二二年）から川平集落において村落祭祀や信仰に着目した民俗学調査を行なっており、Mさんからも、川平の行事や神役について教示を受けていた。Mさんの生い立ちを思いうかげず知るこくなったのは、二〇〇七（平成一九）年の、川平の年の変わり目の祭祀である「節祭」の一連の日程の最終日だった。
文脈の問題「舞踊」には「輕音律」の要素が含まれています。三月を含む6月は「踊り」の部屋で、この期間は「踊り」の時期となります。三月に飾られるのは、春の訪れを示す「花」であり、特に「舞踊」の節期間に特別に披露されるものとされています。三月八日には、 nodo no maika と呼ばれる舞踊が行われ、観客はその美しさに感動するものでした。
2. 「シマ宇宙」への通路

Mさんのように、戦前に南洋群島へ移民として渡った沖縄県人は多く、南洋群島をめぐる国際情勢と、日本の統治体制、南洋群島における移民の生活の実像については、今泉裕美子が詳細を明らかにしている。また、Mさんのように戦後、宮古諸島から八重山諸島へ「自由移民」として、あるいは琉球政府の「計画移民」として移住した人も多く、その詳細は金城朝夫が明らかにしている。これらに詳しく研究に詳しくされているように、沖縄地域において、個人が集落を出て住まいを移すことは決して珍し
ことではなく、むしろ沖縄地域の社会と歴史を考察するうえでは、移民・移住という課題への取り組みはなくてはならないものである。筆者も金城の著作を通じて、沖縄本島や宮古からの移民が八重山の各地に移住して土地を開拓し、新村を建てていることも知っていた。

しかし、それにもかかわらず筆者は、民俗研究の立場から地域社会の調査を行なう過程で、川平の村落祭祀を成立させる一員として、川平の祭祀や信仰に関する様々な事柄を筆者に教えていたMさん、鳥村恭則が述べる、「民俗研究のパラダイムのあり方」の一つとしての「シマ宇宙論」に起因するものであると考える。

島村は、一九八九（平成二）年に宮古島狩侯で村落祭祀の調査を実施した際には耳にすることができなかった、狩侯の人々によるシンガポールや香港と宮古島、日本本土を結んでの密貿易の話題に約二〇年後の二〇〇八年（平成二〇）年思い出がけず熊本県で「出会いなおす」経験をしたことを、沖縄研究の学説史と関わらせて論じている。鳥村が説明する「シマ宇宙論」とは、一つ一つの「シマ人・集落」を「完結した小宇宙」と捉え、「そこに見出される社会構造や象徴的世界観を読み解く」という。一九七〇年代の沖縄の社会人類学調査で広く用いられた視点・方法である。鳥村は、一九八〇年代後半に至っても、沖縄の調査に「シマ宇宙論」の影響力があった。
ことを指摘し、これからの沖縄民俗研究では、研究対象を「シマ宇宙」に閉じ込めることがなく、「人
での移動」に注目した研究を推進してゆべきことを論じている。

二〇〇〇（平成一二）年以降の調査で、石垣島川平の村落祭祀を「住民として担う、宮古出身女性
に出会って驚く筆者にも、「シマ宇宙論」の影響は及び、「シマ」を「完結した小宇宙」と捉える調査
の視点が形成されていたと言える。筆者の場合は、影響が及ぶというよりも、一九六〇年代に始まり
七〇〜八〇年代に隆盛をみた社会人類学における沖縄研究は、少し遠い所にある、学ぶ対象としての
先行研究だったと言うほうが正確である。もっとも、「文化」をいかに「書く」のかといった議論や、
沖縄の「伝統」文化の消滅が叫ばれて幾久しくなっていた二〇〇〇（平成一二）年以降の調査で、
七〇年代を中心にとする沖縄の社会人類学的研究の視点や方法を、そのままで取り入れることは不可能で
あることは承知していた。しかしそれでも、沖縄の文化を調査する時、「シマ」を一つの閉じた世界
と見る視点は、七〇〜八〇年代の沖縄研究から学んだことの一つとして、前提事項のように筆者に身
についていたと言える。

筆者は、「シマ宇宙論」が間違っていると言いたいのではない。先の島村は、一九八九（平成一二）
年に実施した宮古島狩俣での調査から、「シマ宇宙」を静態的に捉えてきたそれまでの研究に対し、
村落祭祀に蓄積される変化の積み重ねと、変化を無かったことにするシマの宗教文化の脈絡における
思考・表現方法を指摘し、「シマ宇宙」の枠組みで、民俗社会の動態的側面を明らかにしている。
3. 宮古島からヤップ島へ

Mさんは、一九三三（昭和八）年に宮古島の平良市字荷川取（現宮古島市平良市字荷川取）の下騒に生まれ、一九四一（昭和十六）年、八歳の時に南洋群島のヤップ島へ渡るが、一九四四（昭和十九）年に宮古島に戻り、ここで終戦を迎える。戦後、兄弟とともに八重山諸島石垣島の崎枝集落へ渡り、川平集落の男性と結婚して川平に居住し、現在に至っている。
宮古での幼少期

Mさんの父親は早くから南洋群島へ行っており、Mさんは八歳でヤップ島に渡るまで、父親の顔が分からなかったという。父親が不在の間、母親が機織りなどで生計を立て、Mさんとの、昭和一〇年生まれの弟、昭和五〇年生まれの兄、三人の子どもを育てた。なお、兄にいたのは、お母さん一人で、機織りしながら、育てていたわけ。だからもう、お母さんも相当苦労して育てたんじゃないかなあと、思うし。まだそんなこともないし、電気もないでしょ？母さんと一緒に行ってくれ、一緒にカズラ取りたりして、お芋掘って。お母さんお芋持ちから、私は鍬かついで、こう一緒に、畑から来たりして。もう小さい時から、いろいろ家族のことやってきたんですよ。

ヤップ島に渡って一九四一（昭和八）年に再会した父親の印象について、Mさんは次のように語っ
ヤップ島に渡る

Mさんは、宮古島で小学校一年を過ごし、一九四一（昭和八）年、三学期の終業式の前にヤップ島に渡る。

今泉裕雄子によれば、ヤップ島を含む日本統治下の南洋群島は、一九二四（大正三）年から一九三一（大正二）年までの海軍による統治時代で、一九三二（大正三）年から一九四四（昭和十九）年までの南洋広域統治時代の終盤で、ヤップ島に渡ったことになる。

だからね。すごいと思いつくけど、それ、私の、お母さんの、力と思う。私がお父さんの顔を見るのは、南洋に行くって、もう二年生の学期。一生は宮古で出たから。二年生は、うっとう宮古から沖縄、うっとうこう鹿児島わたって、行いく。南洋に行くまでに、もう三年生なかった。だから学校も二年生はぜんぜん出てない。一生は宮古で出て、もう、砂川ハル先生って、先生の名前も、顔まで覚える。

で、ずっと行って、もう横浜まで行って横浜の港から南洋の船に乗るから。行って。

二〇〇三年八月一日聞き取り

「シマ宇宙」への通路

211
Mさんによると、宮古からヤップ島へ向かった時、那覇、鹿児島、横浜を経て、南洋の船に乗ったという。今泉裕美子によると、南洋渡航の航路には、一九三九（昭和四四）年当時、往復日数一五日、」の「西廻り線」、往復五四日の「東廻り線」、往復三〇日の「サイパン線」と、内地、パラオ直行線があった。このうち、横浜を出港しサイパン、テニアン、ロタを経てヤップ島を寄港地とする「西廻り線」に、Mさんも乗船したのかかもしれない。

Mさんがヤップ島で過ごしたのは、一九四一（昭和二六）年から一九四四（昭和四〇）年まで、の三年に満たない短い期間だったが、Mさんは島での生活を克明に記憶している。

果物がもう多重のよ。椰子の実もそのままこのフカギみたいにいてっぱいあるし、ミカンも、道のそばにいっぱいあるし、バインもあるし。とうみんな道のそばにいっぱいある。だからもうだれもと食べられる人もいない。特別なもののはもう、ジンジャーピップとかドリアンとか、あんなも、果物の一等品。ドリアンとかシャシャップ。あれはもう、ちゃんとして山に海は豊富であるし。もうはもう、すごい。
ドイツの人も、アメリカの人も（いた）。もう「合衆国」だから。昔はドイツだったっちゅう話

Mさんと、ヤップ島にはドイツ人、アメリカ人をはじめ様々な出自の人がいて、「合衆国」というのは、日本による旧ドイツ領南洋群島の委任統治の間でいくつかの条約が結ばれている。第一次世界大戦後のパリ講和会議に始まる、日本による旧ドイツ領南洋群島の委任統治にあたっては、アメリカが手に利害を有するヤップ島をふくむ南洋群島に関する日米条約などの条約により、アメリカはヤップ島などで布教の自由を行使する権利を得ていたということであり、Mさんの目にも、条約を背景に島上で活動するアメリカ人の姿が映ったのかもしれない。
Mさんはまた、「合衆国」と表現する南洋について、元からの島民もいれば、ロシア人もいえば、フィジーも俺らしかいない。川平の言葉も川平に来て三年で覚えたが、ヤップ島の言葉も、あと一年くらいにいえば、完全に覚えられただろうという。また、宮古の人方は方言が強いと言われるが、Mさんは宮古の人らしくない。くせのない言葉を話すと言われることが多いとい

213 「シマ宇宙」への通路
Mさんが語っていた。一つ所ではなく、複数地点に生活の場を移したこと、さらに、しばらく生活し
た南洋のヤップ島が「合衆国」と表現されるように様々な言語を話す人が集まっている場所だったこ
とは、言葉の習得の早いMさんが、「くれのない」言葉遣いをするようになったことに、関わってい
るだろう。

ほかにも、Mさんはヤップ島の様子を次のように語る。

お金も、昔のお金つってこんな大きい石。石で、こっち穴掘られて。みんなもう使わないから
ブロックみたいに揃に、揃にみんな積まれて。これが昔のお金だったって。

南洋の人も、一島民、二島民、離島民、してみんな、着けるものかもわるんですよ。正直で、た
いへん、いえですよ。すばらしい。嫁に行ってる人も、嫁にわたしは行ってるよってちゃんとし
るしつけあ。ちゃんと嫁に行ってるよ、恋人いるよとしかしつけあ。すばらしい。

ヤップ島は「アイランド・オブ・ストーンマネー（石貨の島）」と呼ばれ、ミクロネシアの島々の
中でもバラオともに、石貨のほか、貝貨、俵貨、枠貨、玉貨といった様々な貨幣が使用される島と
して知られている。現在でも、島の各所に直径一メートルを超すドーナツ状の石のお金が立てかけて
いる。
あるということだが、Mさんもヤップ島で巨大な石碑を見にしていた。

またMさんは、ヤップ島民の装いが身分や未婚、既婚の別によって異なることも、注意深く見ていった。ヤップでは、成人女性はその装いとして、オオハマボウウの絨毯で作った長さ一メートルほどのひもを持ち、首にかけ、胸と背中に垂らした。また、「オン」という腰巻きをも成人女性に特有のスタイルがあり、その中に、日常用、作業用、舞踏用と、生活の様々な場面に応じて用いるべき腰巻の種類がある。こうした年齢や成長段階、社会的属性や活動の場面によって身に着けるものを替えられるヤップの島民を、Mさんよく見て、記憶しているのである。

またMの、女はほら、月経があるでしよう、これもね、私も子供なら、あんなのまだわからない。 damer、イイだけでなく、あの、わたしたしアイはただ一人。っていう歌があるでしょ、アイは聞いたことある？

海の、海岸のそばに、アバイっていってね、みんなの、なんか、家があるんでですよ。ヤップ島に、もうサイパン、テニアン、分からなけど、もう、もうあるかもしなくて、ヤップ島に、この、海岸のそばにみんな家があるんでですよ。そして、そこにはもう、女の一人だけ、いるわけ。だから私聞いたんだですよ。なんで、あの、こっち、子どもも、誰もいないで、なんで、女のだけいるの？と私、聞いたの。聞いたら、もう誰か、聞いたらか分からないで、聞いたら、その
人が、あの、あんたは子どもだから分からないかもしれないけど、教えてくれた。私分かったから、大好きな歌を思い出した。南洋の歌は、ただ一人でおっかけ、海で、泳いだり、なにかしたりして、こっちで（過ごしたということである。これもう、頭から消えないさ。アバイ。だから、「わたしアバイでただ一人」っていう歌もあるさね。周りの人もいる。周りの大人に聞かれたことがある。Mさんはこの小屋を「アバイ」と言っているが、遠藤央によれば、「アバイ」は「ア・バイ」と、「ア」と名前が政治的な決定をする集会所であるという。

小林繁樹によると、ヤップ島の集会所は「ペバイ」、村はずれに置かれた月経小屋は「ダバレ」と呼ばれる。Mさんは、「ヤップ島と、別の機会に耳にした「わたしアバイでただ一人」という歌を、「南洋の小屋」という点で関連付けて記憶していたかもしれない。そうであっても、以上のように、Mさんはヤップ島での短い居住期間に、八九歳の幼い目で、人々が生活する風景を細かく観察していた。
4. ヤップ島からの戦争体験

ヤップ島での戦争の体験は、南洋でこそととれ、快楽的な生活もしたかったからと、Mさんのはヤップ島での生活を振り返る。戦争が具体的にミクロネシアの島々に影響し始めたのは、Mさんがヤップ島に渡った年と同年の一九四一（昭和六年）年、一二月八日の真珠湾攻撃に次ぐ、日本軍のグアム島占領からであるとされる。日本は続いてチルバート、ナウルの島々を攻略したが、一九四三（昭和八年）年二月のマロモン諸島ガダルカナル島での日本軍の敗退を境に、太平洋の戦線での日本軍の敗退が始まり、一九四三（昭和八年）年の秋からは、中部太平洋に展開した日本軍への、アメリカ機動部隊からの攻撃が激しくなった。ヤップ島にはアメリカ軍の攻撃や砲台を築いたということであり、Mさん、家族と共に生活の場としていたヤップ島に戦争が迫った時のこと次のように記憶している。

この戦争がまた特別、ヤップ島に早くに来て、もう焼けのがはらになって。うちなんかの家は農家だったから、家は残っていった。焼けないで。だけどもう町はもう軒も
なかたね、ほんとに。避難して帰ってきたう

山の中で勉強したりなにしたりして、その間もみんなの山の中で空襲の警報かかって。四年生の
学期ぐらいはね。わたしももう学校出るのも三年生だけ。順調に出たのは一年と三年。だから三

年で、もうあとの九九算、九九算も習ってそろばんも習ったからね。だからこれでももう一生。

【昭和二三年八月一日聞き取り】

Mさんによれば、ヤップ島には早い時期に空襲があり、防空壕がないので内陸の山の中へ避難し、

なんちゅうかも山中で続けたという。米軍の飛行機は山の木々の葉も動かすほどの低空飛行で町を空襲し

「焼けのがはら」になった町には病院だけが残ったという。昭和二九年八月一日聞き取り。Mさん

は、宮古島からヤップ島への移住、ヤップ島での戦局の悪化という事情に加え、ヤップ島から宮古島

に帰ってからも戦後の混乱にみまわれ、小学校に落ち着いて通うことができたのは一年生と三年生だ

けだった。その短い期間に小学校で習った算盤と、掛け算までの計算で、川平で今まで商店をやって

きたということである。

②ヤップ島からの引き揚げ

一九四三（昭和十八）年の秋ごろ、米軍が太平洋の制海権を掌握しつつあった中、同年九月三○日
の御前会議ではいわゆる「絶対国防圏」が策定され、マリアナ諸島やパラオ諸島などは「絶対国防圏」内に、マーシャル諸島などは「絶対国防圏」外に置かれ、日本と支那地域は縮小し、引き続いて。

昭和一九（昭和一九）年四月四日には「南洋群島戦時特殊領事屬下」が閣議決定され、南洋群島に「戦時特殊特別制」が布かれ、こうした情勢下、一九四三（昭和一八）年から一九四四（昭和一九）年にかけて、南洋群島から女性、子ども、高齢者を対象とした引き揚げが実施された。

Mさんの一家は、早い時期にヤップ島からの引き揚げの船に乗ったという。

だからもう、荷物も持ってないし。もう一番めの、南洋引き上げ一番だから、あたしなんかは。一

番最初の。船の名前もハンブルグ丸。これも覚えてる。ハンブルグ丸って言って。

船の中では「かんめんぼう」とって、ビスケット、ガーチャー袋に入れて、それからまた、

夜もそれで眠った。なぜかいったら、いつなどこき機が来るかわからない、潜水艦が来る

夜もそれで眠った。なぜかといったら、いつなどこき機が来るかわからない。潜水艦が来る

かわからない。で、もう、いざとなってたら、こう、海上飛び込むでしょう？飛び込んだら、助けを

求めるということで、艦長、ナヴィと、もう下げてさっぱり眠った。浮き袋も。いつでも、夜

も昼も。浮き袋は持って。それでしても、潜水艦は潜水艦、まわってくるし。偵察機は偵察機で飛

機で守ってくれるし。あんなにして、南洋から帰ってきた。
（昭和三年八月一日聞き取り）

一八

年二月二日に横浜に到着した「秋葉山丸」で、域を通って実施された戦時引揚の特質に着目する論考の中で、戦時引揚船の状況という表を作成し、秋葉山丸から最後の一九四四（昭和一九）年二月八日に神戸に到着する「聖川丸」までの引揚船の乗船者数などをまとめている。この表によると、ヤップを発つ船としては「一番め」であり、男性三六三名（このうち、大人一八六名、小人二七名、合計六二四名を乗せて、一九四四（昭和一九）年五月一日に横浜に到着していた「ハングル丸」の乗船者数は一七〇〇人であるという。Mさんが乗った「ハングル丸」も、ヤップの港を出てすぐに、船の下を魚雷が通ったというところであるが（昭和一九年八月二日聞き取り）、乗船者はすべて、辛くも引揚船の船内では、Mさんたちは、米軍からの船への攻撃を想定し、食糧と浮き袋とナイフを昼夜にかかわらず常に身に着けていたという。Mさんの乗った引揚船のまわりには、偵察機などで守られ

220
いから、いえ、せっかくもう引き揚げてきたんだから、自分なんかももう宮古に帰るから
ようつけて、船の中でこうやって、お別れしてるの、聞いて。（昭和八年八月一日聞き取り）

Mさんの話によると、ヤップからの揚程の途上、ハンブルク丸がサイパンに寄港した時、港には、
ヤップからの船が来るということで、Mさんの母のいとこたちがMさんの母たちに会いに集まっていた。

たが、ヤップからの揚程途上の母と、その時点でサイパンにまだどまっていた母のいとことでは、
戦局に対する認識がかなり異なっていたようである。母のいとは港から船上的Mさんの母に向かって、
サイパンは「空襲こないから、こっちに降りといで」と言ったが、Mさんの母は、「おんなし南
洋群島だから、こっちもいつ戦争来るか分からないから、宮古に帰ると言って、引揚を継続した。

Mさんの母の判断は正しかったと言わざるを得ない。この後、サイパンは一九四四（昭和一九）年五月一日にヘンプルグ丸で横浜に到着したMさんたちは、後述
するように本土・沖縄を転々としながら宮古に帰るが、その途中の難航で、サイパン上陸の報を
聞いたという。しかし母のいとこたちはその後、無事、宮古に帰ってきたということである。

引揚の船中では、Mさんは子どもながらに、よく立ち働いたということである。
私が小さいとき、一班、二班、三班、と船の中でもみんな決めて、眠ったからね。私の班が八班だったから、私なんか八班で、そこから。私は、兄さんと私と、船酔いもないから、船、ご飯作ったら、班できて、ご飯取ってきたんです。こはなは兄さんと、ふたりで、ベケッなかなか持って行って、下のこの、船の、ご飯炊く人なんか、もうたいへんね、私なんかかわいがってくれた。あの、こはんの、ちょっとこがした下のほうは、蒸気で炊くから、とってもおいしいそんな。あれ、また、ね。

このように、引揚船の中では班に分かれて共同生活を送り、Mさんのような当時の子ども、船内の一員として多くのことを手伝っていたということである。の二〇二三年八月一日聞き取り
なんがハープルグ丸で横浜に着いた一九四四（昭和一九）年五月の時点では、Mさんたちが上陸した本土は、空中を既に受けた南洋群島からの引揚者の目には、まだ本格的な戦時には入っていないうちに映った。

これがもう、横浜に、私なんか来て、横浜で、横浜の旅館で、みんな、この洋服、配給ももらった。

回もなかったのよ、空襲よ、ほんとによ。だから靖国神社も行って、参ってきただした。神戸も行っ
てみた。あんなにしてあちこち見学もしてきて、見て、あれからずっともうみて、鹿児島で
た長らく滞在して。鹿児島の西郷隆盛の避難場所とか、墓地とかみんな見て、来たんですよ。

三月八日開き取り

Mさんたちは、洋服の配給を受け、風呂にに入ることができ、靖国神社や、神戸、鹿児島の西郷隆
盛ゆかりの地などを見学したという。また鹿児島では、Mさんは宿泊していた旅館の仕事もよく手
伝ったという。

鹿児島ではまた、「きかいや旅館」でやってあって。桜島。ちょうど桜島の真向かいに船着き場があっ
て、そこがすぐ近くだった。だから桜島一歩も見えてたさ。あの旅館におって。それでまた西郷
ちゅう人が隣におって。男の子が。よく友だちで遊んだりして。またこの旅館も。あのころ戦
争中だから人が少ないから。もう旅館には入っぱいしてるし。私がまた手伝いして。もう、
ご飯なんかみんな運んで。こう、あげるんですよね。女中さんのおばちゃんなんか喜んで。何
言ってたかね名前。トミさんトミさんがトミさんと。私が呼んだと思った。たいへん私,
気に入りして。船までもういっぱい、おにぎりごはん作って見送りにきて。

二〇三三年八月一日聞き取り

宮古島に帰還。マリリにあり両親をなくす

④宮古島に帰還、マリリにあり両親をなくす

Mさんはその後、一九四四（昭和一九）年のうちに、宮古島に帰還した。当時一歳、小学校なら
5. 宮古から八重山へ

① 戦後の宮古での生活

一九四五年（昭和二〇年）、Mさんは二歳で終戦をむかえた。Mさんは親戚を失い、両親の不在により、別処をもむかえた。

兄弟は、三歳年上の兄、二歳年下の弟に、一〇歳年下の弟が加わっていた。戦中、戦後の逼迫した社会環境の中で、Mさんは親戚も親戚も懸命に年下の兄弟たちを養ったという。

取下崎で、自分の力で懸命に年下の兄弟たちを養ったという。

朝四時から起き、お茶湯かすため、柄杓で汲んで、こもう、あれしのと、このときに、このとき、このとき、このとき、このとき、このとき、このとき、このとき、このとき、このとき、このとき、このときを見て、どこに何があるか？ないか？ありませんか？と聞くために、朝早く、行って。聞くために、朝早く、行って。
に。どこに何があるか聞きしてください。それです。どここのうちに行ったらあるように、聞かされたら。また、そこ行って、ネギとかいろいろな野菜とか、買って。「おおみやま」って山があるしね。カヤ取ってきてしまった。水につけておいて。また畑にいって。子供の面倒も見て。お芋掘ったり、薪拾ってきてしまったり、自分でも、夜の市場に、持って行って、売って。野菜。今だから、また、畑の骨なんか捨ててるでしょう。昔は宝だった。鰹のガラポネ。安いいの、買ってくる。

Mさんは、早朝四時に起きて、狩俣まで歩いて行き、野菜を買った。どうやって買ってたかというと、朝早くにお茶などの支度のために、庭の水を汲む嫁から、今日はどの家にどの種類の野菜があるかといったことを聞いて。Mさんはその家に行き、野菜を買っていく。それを「おおみやま」のそば、市場で売った。

合間に、小さな弟の世話をし、薪やカヤを集めて整え、懸命に働いた。宮古島は木が少ないの、燃
料としてアダンの葉も集めたという（二〇一九年八月一六日聞き取り）。そうした生活の中で、同世代の女子を見かけると、悲しみがこみ上げる時があったという。

娘さんがお母さんと一緒に、町に行くときなんか、宮古の人はお母さんに、アンナ Türkiye って言うの、背中に負っているものを下ろしてから、泣いて泣いて泣いてから、もう、泣いて。もうそばで、あとからのせてるもの、見てるのも、私なんか、後ろから（見て）、もう、泣いて。またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘れられない。アンナー、アンナーって、こう、またばっぱとして。何回もあるから忘
中で、周囲の人々に好かれるような働き者の女性に育っていたのであり、戦時下の困難な状況でMさんをそのように伸ばした母親を、深く慕っていた。母を思い道端で泣いたという、このような悲しみを含めて、Mさんは、うそみたいな苦労を、よくも生きてきたなと思われる。字が書ければ、自分のことを歴史に書いてみたいと、話していた。

宮古から八重山へ

戦後の混乱の中、小さい弟たちをかかえて、Mさんは宮古島で必死に生活していた。しかしある時、三歳年上の兄が、やはり南洋から引き揚げてきた伯父（父親の兄）に誘われて、八重山諸島の石垣島崎枝集落に移住すると言以外したという。

だから、こちらに八重山に来るのも、私なんか第一引揚者。南洋の。第一引揚者だから、またおじさんなんかがおったわけさ、南洋に。おじさんなんかは、あとから来たわけ。二回、三回目

の引揚者ね。元気で、来て、それで（おじさんが）八重山に（行こう）と。上等に、八重山がい

いから、八重山に行って、行くっていうふうになって。崎枝に来て。伐採して。崎枝の家は、兄

さんが（建てた）。昭和五年生の兄さんが、連れていってもらったって、崎枝で、伐採やって、畑

作って。それで、引っ越すようにになって。
私はもう、いいや、私は、絶対行かないって、もう、二回も戻ったわけ。引っ越しのときに
よ、兄さんが。いいや私は行かない、宮古から動かない、もう一度旅に行かないってねばっ
tけど、あとはもう、兄さんが、もう、みんな、荷物はみんな、もう、荷造りして行くから、そ
したら、行かんではいかないから、もう、崎枝に来たわけ。来てもう、崎枝でもね、自分で畑も
しないといけないし、あんな若い子どもがね、一七歳の子どもが、いろいろやって。

戦後、沖縄本島や宮古から、琉球政府の計画移民として八重山に入植した人は、一九四八（昭和
三三）年一月の西表島上原地区の開拓が始まり、一九五七（昭和三二）年六月の石垣島の於茂登山
ふもとの真栄里山地区への沖縄本島各地と与那国島からの移民の入植までの九年間に、石垣島・西表
島合わせて七六三世帯三三〇〇六人であったという。一方で、自由移民として沖縄本島や宮古から八
重山に入植してきた人々も多くいた。Mさんたちも、Mさん一家よりも後に南洋から引き揚げてき
た伯父に誘われて、八重山へ移住することになった。しかし、最初、Mさんは、宮古の家は荷物をす
べてまとめて引っ越そうとするの
で、仕方なく、Mさんも弟を連れて兄と一緒に関西山の石垣島崎枝に移住した。
戦後の崎枝への入植者は、金城朝夫によると、宮古地域からは、多良間村の七戸及び下地、城辺

（二〇一六年七月二六日聞き取り）
平良から計一〇戸、沖縄本島から二戸、福岡県から一戸の、合計一七戸だったという。崎枝では、
一九四七年八月（昭和二二年三月）頃から自由移民が続々と集まって開墾が始ままり、いくらか落ち着いてきたのは、崎枝の結成式典の頃だったと考えられる。
働き者のMさんは、宮古にいた時分に、ほうぼうから嫁に来てほしいと声をかけられていた。それに
は八重山に来ても変わらなかった。しかし、Mさんは、どんなに頑張れても、弟の面倒をみなければならないからと、結婚を断っていたという。
これがまたもう、私はもう、子どもながらまじめで、一生懸命やってるでしょ、だから余計、男
の人が集中してるわけさ。こんな子どもだったらっていうふうに、考えちゅっからか。
寝てもいきなりこんな人が来る。自分なんかつつきあってちよだいとか、長男の嫁になってちよだいとか、みんな言うわけさ。
次男坊の嫁になってちよだいとか、長男の嫁になってちよだいとか、みんな言うわけさ。
そうしたら私は、ウバーと。あんななんか何を考えていますかと。こんなにしていないのに、私を
嫁にもらうということは、ほんとにありがたい話だけど、できませんと。私はもう、みんな断ったさね。当然さね。

ありがとうございます。私はね、思ってくれるのは、ありがたい。ありがとうございますと、私
は嫁には行きませんと。子ども（弟）がいるから、嫁には sezaitai 行かないと。ありがとう、ありが
ろうと、断って。いまでも一生懸命やってるから、認めておいてるわけ。だけど、子ども
はどうする？七歳。だれが養う？だからわたしたちは結婚しません。好いてくれるのはありがたいけ
れども。

このように M さんは、宮古でも崎枝でも、その働きぶりが周囲の人々に高く評価され、多くの男性
や、年頃の息子をもつ女性たちから、ぜひうち嫁に来てほしいと所望された。しかし、一〇歳も年
の離れた弟を育てなければいけないという責任感から、結婚の話はすべて断っていました。

しかし、一人の男性だけは、どんなに断っても諦めない人で、それが川平の男性だった。そうして
いううち、弟は伯母さんがみてくることになり、川平に住むようになった。なお、それからまもなく、下の弟
は心臓病で亡くなり、もう一人の弟は、当時流行していた「海草を探すビジネス」に誘われ、一人の
男に連れていかれたが、乗船した船が沈没してしまい、亡くなったそうだ。この「海草を探すビ

233 「シマ宇宙」への通路
ジネスとは、本稿の2節でふれた島村恭則の報告にある「海賊船」と呼ばれた密貿易のことかもしない。島村によると「海賊船」は、宮古島で採れる海人草などの海草をシンガポールや香港に運び、換金し、その金で薬品や食料品などを購入し、これを沖縄や本土に運んで売るというものであったという。

Mさんのすぐ下の弟でも宮古の人として、この密貿易に関わっていたのかもしれない。

以上、本稿では、宮古出身のMさんが戦時中に南洋群島に渡り、宮古島に戻り、戦後に川平に移住する過程について、沖縄における人類学・民俗学研究の一つの視点としての「シマ宇宙論」の対象化を視野に、報告してきた。

川平に住むようになった宮古出身者としてのMさんの生活については、今後、稿を改めたMさんが、川平の村落祭祀に携わりながら、一時体調を崩した時に宮古へ行って手を取り合って守って下さる、川平の神さまと二緒になって守って下さる、川平の神さまと宮古の神さまを続けたいと考えている。

Mさんの、歴史的・社会的事件の背景とする、川平という「シマ」に住むに至るまでの経緯を、本稿では廻ってきた。2節で述べたように、民俗学の立場から調査を行なう中で「シマ」を「小宇宙」
小林繁樹『24衣文化』
繁星の腰巻き、フンドシ
印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』

第2版
明石書店・二三五・二六頁、二〇一五年。

第2版
明石書店・二五三頁、二〇一五年。

第2版
明石書店・二百〇頁、二〇一五年。

遠藤央『50人びとをつなぐバイ（集会所）伝統と現在』
印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』

20
小林繁樹『25家・集会所・カヌーハウス・人びとが集まった公共施設』
印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』

21
高橋康昌『12太平洋戦争（第二次世界大戦）戦地となったミクロネシア』
印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』

22
須藤健一『ミクロネシア史』山本真鳥編『オセアニア史』
山川出版社・二三四頁、二〇〇八年。

23
高橋康昌『12太平洋戦争（第二次世界大戦）戦地となったミクロネシア』
印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』

24
須藤健一『ミクロネシア史』山本真鳥編『オセアニア史』
山川出版社・二〇〇八年。

25
須藤健一『ミクロネシア史』山本真鳥編『オセアニア史』
山川出版社・二〇〇八年。

26
川島淳『南洋群島からの戦時引揚の実態について』
沖縄国際大学南島文化研究所・一頁、二〇一六年。
南鳥文化 37、沖縄国際大学南鳥文化研究所、一頁、二〇一六年。

川島淳「南鳥文化」 37、沖縄国際大学南鳥文化研究所、四頁、二〇一六年。

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に

川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について」出港・航海に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に
それは、「シマ宇宙」の神観念を中核的に背負う女性神役の問題にも通じる。女性神役は、王族の間で、大君を頂点として鳥々から倉庫まで張り巡らされた階層的組織に組み込まれていた。神観念のうえで「シマ」と外界としての「ニライ・カナイ」を行い来し、「セヌ」を更新して「シマ」を守る女性神役は、現実の社会生活においても、「シマ」を離れた外の世界との繋がりを有する存在だった。